

[退職記念講演]

## 地域社会と NGO

星野 昌子\*

近藤龍夫 学部長 星野先生については、みなさんもうよくご存じかと思いません。日本の国際ボランティア活動の草分け役を果たされた方であります。新聞、テレビなどでその活躍ぶりはしばしば紹介されています。

先生は1954年、慶應義塾大学文学部社会学科を卒業され、専業主婦として平凡な家庭生活を送る道を選ばれました。ところがあるとき、「自分は一生このままでいいのか」と自問し、一大決心して家族と別れ、青年海外協力隊に参加。同協力隊の第一期生として65年、ラオスの首都ビエンチャンに赴任。ラオス人に日本語を教えることからボランティア活動の道に入っていかれたのです。

ラオスでは日本語教師を勤めたあと、在ラオス日本大使の秘書を3年弱おやりになり、さらにラオスからタイに移って、日本航空バンコク支店広報担当を7年余りやっておられます。こうした発展途上国での生活を通してボランティア活動への思いを強くされたのであります。

その結果、1980年、日本国際ボランティアセンターをまずバンコクで設立、その事務局長に就任。さらに東京に本部をつくり、その事務局長に就任され、この分野での第一人者として、その後ずっと幅広い活動を重ねてこられたのであります。

その間、総理府の対外経済協力審議会委員や経済企画庁経済審議会委員などもおやりになり、こうした活躍に対し、外務大臣表彰、内閣総理大臣表彰など数々の表彰をお受けになっています。

---

\*ほしの・まさこ：日本NPOセンター代表理事 日本国際ボランティアセンター特別顧問  
敬愛大学国際学部教授

President, Japan NPO Center; Special Adviser, Japan International Volunteer Center;  
Professor of International Cooperation, Faculty of International Studies, Keiai University.

1998年に本学部の教授に就任され、NGO論、ボランティア活動などの授業を担当していただいております。今日は「地域社会とNGO」について、先生の貴重な体験をふまえたお話を伺いたと思います。

初めにNGOについて最も簡単な説明を申し上げたいと思います。レジュメに書きましたように、国連によって使われ始めた用語で、Non Governmental Organizationの略です。これについて皆さんは、国際協力をやっている非政府の団体だと理解しておられるのではないのでしょうか。いろいろな非営利、非政府の市民による活動や組織がある中で、国際協力に携わっているのがNGOであり、そうではない地域における福祉とか文化・芸術など、そういう自分達の足元の問題に取り組んでいる市民の活動がNPOだと。そういう理解が一般的だというふうに思いますが、そのところは間違っております。

たぶん、皆さんの耳にマスコミを通して届きはじめてのは、NGOのほうが早かったのではないかと思います。早くはインドシナ難民、私などが活動を始めた1980年代、遅くても90年代に入ってまいりますと、NGOが何かとマスコミで伝えられ始めます。そしてNPOについては、たぶん、一足遅れて阪神淡路の大地震のあとであったと思います。

このNPOは、アメリカで主として企業と対応する形で以前から使われていると聞いております。企業は利益、Profitを追求します。そして、その利益は株主に分けていきますね。当然、企業は社会の活性化に大きな役割を果たしています。でもアメリカでは、利益を追求しないのに社会を活性化するいろいろな動き——個人から始まってグループができ、そして大きな組織になっていくような動き——が、顕著になってきました。そういうなかで、それらの運動・組織体を説明する言葉としてこのNon-Profit Organizationの略語であるNPOが、戦後まもなくして使われはじめています。このNPOですが、NPOというとNon-Profit Organizationですからprofitを上げてはいけないというふうに、日本ではお思いになる方が多いようです。決してそういうことではありません。Not For Profit

Organization というふうに言ったほうが分かりやすいのではないかと思います。

例えば、寝たきり老人のために健康的な材料を使ってお弁当を作るような女性のグループが、その需要に合った小回りの利く仕事をしたことで、自治体からも補助金が入るようになり、委託されてどんどんお金が入ってくるようになる。そうしますと「清く貧しく美しく、そのようなお金はもらわないでサービスするんです」というのではなくて、入ってくるお金はどんどん入れて構わないわけです。そこには有給の職員が生まれても構いません。そして、良い仕事をすればするほど外から入ってくるお金、余剰のお金も増えてまいります。しかし、有給職員は生活に必要な給料を取って構いませんが、関わっている人達がまるで株主のように利益を分け合うというのではなくて、その余剰の profit については、より多くの不特定多数の受益者のために事業を広げていくことに回す、つまり profit を上げて良いけど、そのために働いているのではないですよ、というのがこの NPO です。そのところが、どうも日本では誤解されています。

先ほど、近藤先生がお話ししていただきましたが、一番最初は日本奉仕センター、現在は日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center: JVC) ですが、これも NPO です。代表的な NGO の一つとして、世界 8 ヶ国で数億というお金を事業費として活動しているわけですが、日本社会における法的な地位は NPO 法人です。国連の会議に参加した時など、各国の government、政府関係者以外は全て NGO となります。つまり国際協力をしていようがまいが、government でないものは国連から見ると全部 NGO なんですね。そして国際協力をやっている NGO の団体が、日本での法的な地位をきちんと確立しようとしますと、これは NPO 法人になるしかありません。ですから日本国際ボランティアセンターも、2 年前の 4 月に NPO 法人として認証を受けたわけです。そして、国際協力というのは、NPO のさまざまな活動分野の一つであること、それを初めにはっきりさせておきたいと思います。

それから、今日のテーマの「地域社会と NGO」ですが、これについて

「僕が実際やりたいのは地域の問題なんだよね。そうすると、国際協力という今日の話はちょっと違うかな」とお思いになっても、その心配はございません。そういう地域の問題も含めた民間非営利の活動を、今日の講演においてはNGOとして表現しているだけです。これは前置きとして最初に申し上げておきたいと思います。また後ほど、何かご質問がありましたら、ぜひお尋ねいただきたいと思っております。ご意見や反論でも結構です、活発にお願いしたいと思います。

## 人々の心を結ぶ NGO

次に、「先進国と途上国そして日本のNGO」と書きましたけれども、先進諸国では、第一次世界大戦の敗戦国、その他で活動を始めたという恐ろしく長い歴史をもって、伝統と多くの経験に基づいてすばらしい仕事をしているNGOがたくさんあります。そうすると「途上国にはNGOっていうのはないんじゃない？ まだ国も貧しいし、物質的にも乏しいし……」というふうにお考えになるかもしれませんが、これもまた間違いです。「NGOを生み出す社会条件」は先進国の場合と途上国とは大変違います。あまりにも生活が苦しいがゆえに、自分達、主として農民ですね、農民が手をつないで、そこで組織を作って闘っていかなければ生活を守ることができない。そういう人達によって作られた強固なNGOも途上国にはあります。その一つの例がスリランカのサルボダヤという所で、私どもが活動を始めた二十数年前には既に大変有名でありました。「途上国だからNGOは生まれてこない」と考えるのは間違いです。一方、物質的に豊かな国々には、世界の貧しい人々と自分の生活を比べて「放ってはおけない」という気持で組織を作って活動する、あるいは豊かな国のマイナス要因（例えば環境問題など）につき動かされて活動を開始するケースが多いようです。

そして、私自身も、先程近藤先生がお話くださいましたように、1980年にタイのバンコクでJVCを皆と一緒に立ち上げたわけですがけれども、その時、自分にNGOという意識があって、こういうふう活動して、

NGOの資格は何であって……というようなことがよく分かっていたわけではありません。無我夢中で、ちょうど阪神淡路の大地震の後のように、日本全国からバンコクへ駆けつけた——主として若者でしたが、仕事を辞めて駆けつけた方もいっしょって、1年間に約1,000人という方が来てくださったんですが——その人達を含めて、インドシナ難民の状況を日本人として放っておくわけにはいかない、何かしよう……と。そういう気持ちでした。そこには、本当にいろいろな力を発揮する方がいました。例えば主婦の方など、会計の部分で、どんどん日本から送られてくる募金、それをどのように使ったかを記録する。専門的にこれは銀行の指導を受けまして、後で外務省にびっくりされるほど、発足当時から良い会計処理をしたのはバンコク在住の女性達です。また、英語がすばらしく良くてきて、JVCを日本のNGOとして承認させるためにタイの陸軍、あるいは内務省との交渉にあたってくださった方もいます。もう、ありとあらゆる人達がこのような状況を放っておけない、自分達も何かしようとして行動していたわけです。初めは東京にも大阪にも本部もなく、そして組織として得意とする分野、これも分かりません。集まってきた人の能力を頼りに活動したわけです。年間の予算も分かりません。「日本もだいぶ経済が良くなりましたから、たぶんそうそうに集まると思います」という具合ですから、タイ政府はイライラしまして、「そんなのを日本のNGOとして認めるわけにはいかない」と言うなかを、先程お話しした主婦が、タイの内務省と陸軍から許可をもらいまして、設立をしたというのがJVCでございます。

なぜこういうお話をするかというと、その時には本当に何もなかったのです。事務所もない、本部もない、年間の予算もない。ただあるものは、目の前の状況に対して人間として「私は黙っているわけにはいかない。私はこれができると思う」という思いだけでした。けれども私は、そういう思いを抱いた人が5、6名いれば、その目的が正しくてニーズがあって、そしてやり方が間違っていなければ、必ず組織として良い行動をすることができるということを申し上げたいのです。ところがタイの日本大使館は、

それを大いに支援して下さったわけではありませんでした。「女、子供に何ができるか」というわけです。私が女性でしたから、そして子供というのは10代の終わりから20代くらいの人達を指して言っていたと思いますが、こんな人達に日本から相当の額のお金が送られてくることは大変だと、これは日本国にとって面倒なことが起きるに違いないということだったようです。そして銀行に口座開設のお願いに行きましたところ、大使館の方から前もって「JVCが口座開設の申し込みに来たら断ってくれ」という指令が入っていて断られました。仕方がないので別の銀行にお願いしましたが、年間に億を超えるお金が来ました。3年経ちまして断ったほうの銀行が「申し訳なかった。うちのほうにも口座を開いてください」と頼みに来ました。これはほんの一例ですが、やはり「女、子供や普通の日本人に何ができるのか」という考えは官のほうに非常に強くあったと思います。

もう一つ申し上げますと、インドシナの難民がカンボジアからタイに流入しましたが、陸路を伝ってきた人達の問題はボートピープルよりも長引いて大変な状況になります。そうしますと、私達は難民キャンプで救援もやって、日本に定住された方ももちろんお世話しているのですが、これで良いんだろうかと思うようになりました。現象的に現れてきた人達だけを救うのは、何か応急処置的ですよ。そうではなくて、この人達が近い将来自分の国に帰っていけるような、そういう状況を作るのでなければ効果的な解決にはならないのではないか、そういうことを考え始めました。いくつかのNGOと国際赤十字が、Flying Tigerという貨物用の飛行機——ものすごい風がびゅうびゅうと入ってくるようなものなのですが——それをチャーターしまして、NGOスタッフ十数名がカンボジアの国内視察に行きました。私も参加しましたが、この時も大使館に大変叱られました。今やっとタイとの友好関係の中で日本のNGOが活動して感謝されているのに、そんなことをして、タイとは国交のないカンボジアに入ったら、タイが怒って日本のNGOを追い出すかもしれない、と。そういう理由でカンボジア入りをさせたくなかったのです。

日本大使館は、そこに住んでいる日本人の安全の保護がまず第一の仕事です。ですから、大使館は「危険な国境で働くのは今日は危ないからもう行くな」と私達に命令します。しかし、私達はそれに従うことはできません。どこが私達を統括しているかと申しますと、国連の諸機関です。JVC 場合には、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) だったり、世界食糧計画 (WFP) だったり。いろいろな国際機関がありますが、自分達の管轄の地域が決まっております、どの地点より先に行ってはいけないなどということは、国際機関がそれぞれ無線で連絡してきます。そこで、日本大使館が今日は引き上げると言っても従うことができませんから、また呼び付けられて叱られたりとか——これについてはあとでお話する鈴木宗男氏からみの NGO の拒否というようなことにも繋がるんですが、NGO はそのように、それぞれが自分の基盤とする母国を持っていても、実際その国を出て海外で活動する場合には、主として国連の配下で働きます。ですから、常に日本政府に対してはもちろん、従って良いと思うことには従順に従います。協力すべきは協力いたします。しかし、そこは違うというところは「No」と言うのが当たり前で、それができない NGO というのは、NGO としての資格はありません。つまり日本国民ではあるが「地球市民」としての立場が先行する、ということです。このようにして、少しずつ日々の活動の中で「NGO ってこういうことなんだ」と理解できるようになりました。

そして、やっと自分達の活動が世界では NGO と呼ばれているのだと実感するようになった頃、もう一つの驚きに出会いました。ジュネーブで UNHCR が主催する国際会議があって、そこで本会議の前に NGO の会議がありました。隣に座っていたオーストラリアの NGO のスタッフにこう言われました。「星野さん、知ってる？ 日本とドイツは NGO じゃなくて Quango っていうのが多いんだよ」。Quango というのは quasi という英語がありますね。「疑似」というか「本物じゃないんだけどちょっと見たら同じような」という意味なんです、その quasi を前に付けた NGO です。続けて読んで Quango. NGO という体裁をとっているけれども、

発足の時から役所の人、あるいはお金が入って設立された組織という意味で、本物じゃないんだと言われました。そして、結果として思ったことは、世界の常識から見るとだいぶ非常識なことが多いのが、残念ながら我が国であると、そんな感じですね。日本の NGO は、実は 1970 年代に良い NGO、今は「シャプラニール」という名で呼ばれている NGO などがポツポツできておりますが、多数に上る動きというのは 80 年代に入ってからです。

次に、レジュメの三番目にある「NGO を生み出す社会条件」についてお話ししたいと思います。さっき申し上げた本当に貧しい人達が自分達で自営・自衛のために組織化する、これは例外といたしまして、このアジア・オセアニアに見られるわりと近年の動きとしては、日本を追いかける韓国があります。フィリピン、シンガポール、マレーシアは日本よりも進んでいるところがあります。アジア・オセアニアの国々に共通することは、経済的にはまあまあのところまで来た、そして物質的には充足してきたけれども、今度は経済成長の負の部分、環境問題ですとか、あるいは貧富の差が開いていくとか、全体が貧しかった時には無かったような問題が出てきていることです。そして、そういうものを抱えた社会において、この NGO が次々と誕生しているという傾向が見られます。これは 5 ヶ国（イギリス、韓国、日本、フィリピン、シンガポール）が、1 年間にわたる調査を行った結果にもはっきりとそうした動きが出ております。日本は、かなりそういう意味では前に進んでいる面もあります。

レジュメの六番目に「官高民低意識の払拭」と書いてありますが、NGO の方の中に役所のほうが偉いんだという意識がある以上は、本物の NGO はできません。官のほうが上なんだというのは官側には厳然としてあります。自治体の方々は「主役は市民であり県民である」と、これは理念としておっしゃいますけれども、でもやっぱり「俺達のほうが上なんだぞ」という意識があるように思います。ここのところは双方に責任がありまして、問題があるのです。ですから、NGO を生み出す社会条件の中にもう一つ加えなければいけないものは、やはり、民主化が進んでいること、

だと思えます。

レジュメの四番目の「ボランティア」にいけます。このボランティアなんですけど、私も実は良く分かっていなかったところがあります。先程、近藤先生が一念を発起してと確かおっしゃったと思うんですが、そんな立派な考えで私は青年海外協力隊に参加したのではなくて、恥ずかしいことなのですが専業主婦生活に破綻をきたしまして、日本で行き場所を失って参加したというわけなんです。「青年海外協力隊」、日本語ですとなんか軍隊みたいな名前なんですけど、英語ですと、Japan Overseas Cooperation Volunteers、英語では volunteers が入っているんですね。そうしますと、私はボランティア的な生き方を三十数年以上やってきているということになります。学生さん達にも申し上げたんですが、ラオスの文部省に着任の挨拶に行きましたら、文部次官が、非常に学者肌の方なんですけど、「実はラオスには日本の青年海外協力隊の日本語教師はいらないと言いつけたにもかかわらず、あなたは送られて来たんです」とおっしゃいました。これはショックでした。「どうして必要がないのに私が来てしまったんだろう」と。そういうことですから教える場所も何も用意されていなくて、自転車で半年ばかり駆け回りまして、自力で師範学校と技術学校で教壇を確保するという経過になりました。その後、生徒とは非常に良い関係が生まれて良い思い出ばかりなんですけど、「いりません」と言われた時に、国際協力って一体誰のためにするのか、援助をする側の都合じゃないかと思いました。たぶん、送り出しやすかったんですね、日本政府は。それに私はガンときまして、そのことが15年くらい私の中でくすぶり続けていました。そして協力するんだったら、本当に向こう側の人達がしてほしいことに応じていく、対等の立場で人間として応えていくということが最も大事なことであって、それが私にできないだろうか、そういう思いがJVCの立ち上げに繋がったというふうに思っております。

JVCが立ち上がって次の年は、国際社会福祉協議会の2年に1度の世界大会の年でした。イギリスのブライトンで会議がありました。分科会のテーマの中に「難民」があったものですから、東京の社会福祉協議会の勸

めで私どもはイギリスのブライトンへ行きました。この頃、インドシナ難民問題では、「どこの国の政府はどういうふうに対応していた」、同時に「NGOは何をしていた」、という二つが、ベアになって会議に出席することが、その数年も前から世界では当たり前のことだったんですね。本当に遅れて私が出席したわけですが、その時に、イギリスのボランティアの父と呼ばれるアレック・ディクソンさんが私に会いたいとおっしゃって下さいまして、週末にブライトンから列車に乗りましてロンドンへ出かけました。ディクソンさんは5年前にお亡くなりになりましたが、お若い頃にはイギリスの若い医者をつアフリカに派遣して救済活動をやっておられたのです。しかしある時、「ボランティアって一体何だろう。イギリスを含めてヨーロッパ諸国がアフリカを植民地化したことによって、こんなにもアフリカが疲弊している。そして今、お恵みをするように、若い未熟な医者を送り出して、良いことをしているような気になっている。これは何か間違っているんじゃないか」と考えて、その団体をディクソンさんは辞めてしまいました。そして、ロンドン全体ではなくてロンドンの区の、警察署長さんの裁量でそれに参加しようといういくつかの刑務所の受刑者——将来がある若者——を重度身障者の施設にボランティアで送り込むというプログラムを始めます。そのことは、私はあとになって分かったのですが、ディクソンさんが「今日はある警察署長さんの家に呼ばれている」と言うので、10分程離れた警察署長さんのお昼ご飯に私も一緒に招かれて行きました。もう12、3人の方が食卓を囲んで私達を待っていました。食事が始まって程なく、不意の来客がありました。「不意の客がどうしてご飯の時に急に入ってくるの。イギリスってそういうことやらないんじゃないかしら」と思っていましたら、黒人と白人の混血の40歳くらいの男性がつかつかと寄ってきて、立ち上がったディクソンさんとガバッと抱き合っ背中を叩き合っ感動的なシーンを展開しました。二言、三言言葉を交わして帰ったんですが、その方がディクソンさんのプログラムで重度身障者の施設に行った中の一人でした。彼は父親が誰だか分からないというようなロンドンの場末の生まれで、頼りにするお母さんからも「どっか行って遊ん

でおいで」と邪魔にされながら育つうちに重い罪を犯してしまい、刑務所にいたわけです。ある時、1日中、車椅子のおばあちゃんでも話もできないような方のお世話をして、帰ろうとした時、そのおばあちゃんが、話ができないからじーっと彼の目を見て「あなたはもう帰っちゃうの？ 今度いつ来るの？」と、その眼差しで問いかけていたそうです。それまでどこに行っても「このガキ」と追い出される、そういう対応しかしてもらったことがなかった人が、「今度またいつ来るの？」と言われた、そのお年寄りの眼差しで彼の心が変わります。こんな自分でも求めている人がいるんだ、この人は僕をちゃんと認めてくれている、僕にだってできることがある、そしてこの人が喜んでいて。そういう状況の中で彼は一生懸命ノルマをこなして社会へ復帰するわけです。そして3年に1度くらいロンドンを通りかかる時にはディクソンさんのところに「元気で社会人としてやっています」という報告に来る。その現場に、私は幸いにも居合わせたわけです。

ところが私が驚かされたのはそれだけではなかったのです。その男性が帰ったら、ディクソンさんが「星野さんはボランティア活動を長年やっているようだけれど、あなたがやっている活動によって救われている人は一体誰なの？」と聞くのです。「そんな変なこと聞かないでよ、そりゃ、インドシナ難民だと思いますよ」と言うと、彼が「それは違う。それによって救われているのはあなた自身なんだよ。ボランティアは、活動している人自身が生き生きとして生きることができるようにさせているんだ。救われているのはあなたですよ」。初めは何か「えー？」と思いましたけど、その言葉で本当に私は目から鱗が落ちたという気がしました。

ちょっと話が飛びますけれども、レジュメの中に「敬愛大学国際学部の学生の場合」と書いてあるところがありますが、私が担当させてもらった3年間に、何人かの人達がちょうど今の話と同様の経験をしています。自分にはこんな事ができる、そのことで相手が喜んでいてということを体験したわけですね。最初の年と2年目は学生が7、8人という10人足らずの人数でしたので、非常に良かったと思います。学生の一人一人といろいろな話をしました。例えば学校で良い学生として認めてもらいたいという思

いについて……エレベーターに乗ったら、たまたま先生と一緒にになった。先生が何かこう、目をそらしてあんまり僕、あるいは私と顔を合わせたくないような顔をしている。目と目を合わせて「こんにちは」と言う先生もいるけれども、これは先生の側からすると、やっぱりこう耳に5つとか7つとか金属のイヤリングをガッと並べまして、ちょっと恐ろしいような学生に、近い所で出会ってしまうと、目をそらせたくないのも分からなくはないんです。でも私は、そういう学生にも何かそうする理由がある、それぞれ動機は違いますけれど、何か自分を外見のそういう形の中にはめ込むことによって、反発を表現したい……と。多くの場合、それは社会、と言ってもいろいろな社会——家庭であったり、両親であったり、地域社会であったり、学校であったり——が自分の価値を、自分が持っている良いものを認めてくれない、認めてほしい、というのが、そうしたスタイルなどに現れると思うんですね。

今朝、朝日新聞を電車の中で見てましたら、「ウォルマートが日本に進出して来た。西武と提携する」という記事がありました。その創設者のスローガンの中に「10 フィート以内のお客様には、ちゃんと目を合わせて対応する」と書いてありました。これはお客に対するものとしては当然で、ウォルマートは売るほうですから、「ありがとうございます」とか「どういってお買い物ですか?」とか言うわけです。このお客との関係は、学生と先生との関係とはもちろん違います。でも、私がまずこれを読んですぐ思いましたのは、それこそ、10 フィート以内の学生はもちろん、茶髪であろうとも、どんなにおどろおどろしい姿をした学生であろうとも、決して目をそらさないで虚心担懐に学生の目を見るところから、学生と私達教師の関係が生まれるのではないかということでした。そして、そういうところから入って行って、自分の存在というものを尊重されている、これはこれで良いんだ、あの先生は私のことをこういうふうに思っている、と感じるところで学生はいろいろなことを語りだすというふうに、私は思っています。例えばこういう学科は好きではないし、できないという学生、本当は英語が上手になりたいと思ってもなかなか上手くなれない学生、

いろいろ事情はあるでしょう。でも、そんなことはあまり問題ではないんですね。お互いの目が合った時から、急速に垣根が取り払われる、そういうことを何回か経験しました。

実は今日、ここにいらっしゃる学生さんの中でも、私の記憶に残る質の良いボランティアに発展した人達がたくさんいますが、その1例を申し上げます。多古町出身の学生がいました。どうも勉強はあまり得意ではなさそうでした。「ボランティア活動」のクラスでいろいろな話をするうちに、「どんなことをやってみたい？」と——つまり「こういうことをして下さい。何曜日にはあそこの施設に来て、何をやって下さい」というのではなくて——あなたは何がやりたいかと尋ねました。すると、教育委員会と一緒にプログラムの中で、地域の小学生達が数日間、親と離れて、ちょっと子供には厳しい内容の生活を体験する——年によって違うようですが、ちょうどその学生が参加した時は長野の山を歩いたりしたようです——そのお手伝いをやりたいと言いました。私は「そうですか。それで活動しましたね。じゃあ、点数あげます」っていうのでは無責任ですから、一度準備のためのミーティングに私も出席させてほしいとお願いして、日曜日に行きました。彼がお父さんの車を運転して駅まで迎えに来てくれました。そして、参加する子供達のお父さん、お母さん、学校の先生、お手伝いをしている教育委員会の方などが一堂に会して真剣な会合を開いているところに、オブザーバーとして参加して、その学生がいかに頼りにされているかを知ることができました。その日から、子供達は自分で飯盒でご飯を炊き、カレーライスを作って、自炊で凌ぐというのを練習したのですが、「あら、カレーのルーが1個足りないわ」「彼に頼めば良いんじゃない」というように、皆が敬愛大学の学生に頼っていることが、いろいろな場面に現れていました。彼はこういう世界を持っている人なんだとしみじみ思いました。このように、自分ができることを周囲が必要としてくれているという状況は、一人一人の心の中からボランティアな意志を引き出します。これは制度でやっても全然効果が上がりません。

実は3年目は、私のやり方は大失敗でした。ボランティア活動の受講生

は今までどおり 10 人くらいかなと思ってシラバスを書きました。ところが、63 人来ました。これでは、一人一人の話を聞いている余裕が無い。それで自分でやりたい活動を紙に書いて出してもらい、報告してもらおうという形で行いました。活動が 63 もあるんですから、私もいちいち訪問もできません。電話をかけたところもありましたが、この年は手軽に単位を取れる授業じゃないかとすっかり思われてしまったようで……人数制限をするべきだったのです。

話を日本社会全体のことに移しますが、ボランティア活動の義務化というような話が 1 年くらい前にマスコミで取り沙汰されました。しかし義務として行う活動は、本物のボランティアな意志を引き出すということにはむしろ悪影響があるのではないかと、私は思っております。ボランティアは誰のためにやるのかというと、それは自分のためです。「自分のためにやって良いのですか」と言う方があるかもしれませんが、まず自分のため、そして自分の意志に従って責任を持った活動をしていけば、その活動の線路上には、その相手がそのことを喜んでくれるという時が必ずやってくるものです。その時に最も人は充足感を感じる。ですから、初めは自分のためであっても構わないと申し上げるわけです。

### 活力ある NGO であり続けるために

次に「NGO とボランティア」についてですが、NGO とボランティアは切り離すことができません。ちょうどリンゴを横に輪切りにしたように。真ん中に芯がありますよね、黒い種も。一番おいしいのはこの周りの私達が食べる場所ですが、ここがボランティアです。そして芯の部分が NGO です。しかし、良い芯が無ければおいしい果肉は育ちません。そういう関係ですから、NGO=ボランティア団体という考え方は間違いです。NGO は有給職員も抱えた一つの組織ですが、ボランティアは、その NGO にとって欠かせない存在なのです。そして、これらボランティアの、おいしいところが多ければ多いほど、組織としても良いわけなんです。では、こういう組織を育てていくには何が必要か。私は、「ボランティア

を基にして組織を立ち上げたけど、若い人がだんだん少なくなって、次が入ってこなくて組織が硬直化していて悩んでいます」という方によく会います。そして「私は頑張ってきたけど、ここで私が辞めたらこれはどうなるかと思うんです」と言いますが、その方は、まず辞めなければいけません。それは、組織を握りすぎてしまったんですね、ちょうど、クリスマスツリーのように。だいたいNGOを立ち上げる方は、人間的な魅力に富んだ、素晴らしい人が多いです。マザー・テレサのように格別の人ならクリスマスツリーも結構です。上でキラキラ輝けば下も生きてきます。しかし、我々は皆、普通の人間なんです。ですから、小さいクリスマスツリー型に組織してしまったならば、絶対につぶれます。

ではどのような組織が良いかというと、それを私はジャガイモ型と言っていますが——畑にジャガイモが実る頃には茎は汚くなって枯れてしまい、外から見ると全然きれいでも何でもない。しかし土の中を探っていくと、そこそこに芋があって、それらは様々に繋がってネットワークをしながら、それぞれがいろいろな活動を思い思いにしている。JVCはそういう組織です。私はラオス、タイに17年間暮らしましたのでその活動はインドシナ——ラオス、タイ、カンボジア、ベトナム——から始まりましたが、そこから入ってきた人達は、中東の問題に深く関わる人や南アフリカで活動する人、ラテンアメリカに関わる人、というふうに多彩で、これはちょうどジャガイモのようでした。組織を作るからには、やはりジャガイモ型でないと本当の力にはなっていくというふうに思うのです。

ジャガイモ型にするために欠かせない二つの条件があります。まずは個々人の思いから活動は始まるのですが、組織の中で情報を共有することです。幹部の偉い人だけしか知らないことがあってはいけません。情報を共有させるためには相当のエネルギーを要します。1,000人という会員になっても、事務所に出入りする身近な人には、たとえ今日入ったばかりのボランティアにでも、組織は今どういう問題を抱えているかという情報を、ニューズレターだけでなく密に伝えていく必要があります。今は幸いにしてEメールなどが発達してまいりましたから、そういうものを通して情報をど

んどん伝え、それに対する意見を吸収していくことができます。情報の共有が無ければ組織は活性化しません。もう一つは、何らかの形で全ての人がプランの決定に参加できるということです。どこかで決定されたことが上から下ろされてくる、そして自分は単純労働のボランティアをする、という組織ではボランティアは決して元気になりません。例えば総会という形で来年度の予算に反対できる、これも決定への参加ですね。情報の共有と決定への参加。私は、自分の活動の中からこの二つが非常に重要なことだと思い、また一緒に働く仲間達とそういう世界を作ってきました。

実は大学の中での、この決定への参加というものについて言いますと、今日は理事長も学部長もいらっしゃるのですが、一教授としての私からは見えないものでした。私は、常識からすると大学の教壇に立つという人間ではありません。修士も持っていないし、ドクターももちろん持っていません。にもかかわらず、これだけ大勢の若い人達と接して充実した日々を送らせていただいて本当に感謝しているんですが……、もしかしたら、大学にはそういう NGO 的な発想は通用しないのかもしれないかもしれません。私はあまりにも他の世界を知らなさすぎるのかもしれない。しかし、私がもし何か思い残すことがあるとするならば、それは、この「決定」がどのようなプロセスでなされ、そこにどういうふうに参加できるかということがクリアでなかった……ということです。それが私はとても残念でありました。勝手を申し上げて申し訳ありません。

次は、三番目に書いてあるところです。日本は、ご承知のように集団——集団といっても家族のような小さな集団から企業のような大きな集団まで——その全体の和のためには、個をあまり際立たせませんでした。和を尊重し、「これは良くないな」と思っても黙っている、実はそれが経済大国になるために非常に役立ったわけなんです……。しかし、そのやり方でのシステムが機能しなくなってきた今、「自分はこうなんだ」という個人の考えに従って動くことができなければ、新しい日本への切り替えはできないわけです。これがいかに難しいか。集団の和の尊重と個の確立は、私は二者択一の関係ではないと思っています。最近、確固とした個性をもっ

て活動を始める人が多くなり、NPOの認証を受けた団体だけでも全国で6,000を超えています。「これをやっても何の得にもならないし、収入になるわけでもない。でもやっぱり、これをやりたい」ということで活動を始めるわけですから、非常に個が確立している人達ですね。しかし、その人達が「私が、私が……」と言って、そのグループ内の和が壊れてしまうような、言ってみればアメリカのような自由競争を核とする状況を作り出しているかという、そうではありません。やはり、日本人の独特な能力だと思いますね。例えばあるグループに入った時、「あ、ここに参加している人はこの問題についてはこうこう、この辺はこういうふうに考えてるな。この辺はこう思っているんじゃないかな」というのを、大方の人が微妙に察知します。これはコンピューターなんかにはできない、日本人独特のものすごいセンスなんですね。そういうなかで、「体制がこう考えているから自分はちょっと黙っておこう」というのが今まででした。でも「お言葉ですけど、これはこうじゃないでしょうか」と言えるようになった。しかも相手を傷つけない。自分を抑えないで意見を言う日本人が増えてきました。これは二者択一の関係ではなくて、日本のすばらしい集団の和の尊重の中にも個を埋没させずに確立し、なおかつ説得していく力をつけつつある人が増えているということです。こういう学生が増加し、社会に出て、そして日本を変えていく。真のボランティアについて学ぶことは、そういう力の源泉になると思っております。

次に五番目の「有償か無償か」についてですが、ここもちょっと複雑です。どうも日本では、ボランティア活動というのは無償でお金を頂かないでやるのが立派である、というような考え方が元々あったかと思います。それはキリスト教に基づいた活動なので、その考え方が大勢でした。ところが今、有償のボランティア活動も考えられるようになってきました。イギリス——ロンドンの東の方でしょうか——にはパキスタン系とかイギリス国籍の非常に貧しい生活をしている人達がおります。4年くらい前、私はイギリスの社会学者であるハーグウェルさんと、この有償か無償かということについて話したことがあります。ボランティアというのは無償であ

ることが理想だということになると、貧しい人はいつもボランティア活動の受益者です。白人の豊かな人達が出かけて行って、学校教育についていけない貧しい子供達を指導したりするわけで、パキスタン系などの貧しい人達はいつも助けをもらう側なのです。ところが、そのお母さん達は健康だし、年寄りの面倒も見ることができるし、大家族として生きてきた経験が長いだけに、むしろ白人達よりも本当に良いお世話をすることができるわけです。人間として、そんなすばらしい力を持っているのに、出かけるための交通費が無い、そこで外食するお金が無い、そういうことによって、常に受益者側に立たせるということはおかしいではないかと、そういう話をいたしました。今、イギリスの地方自治体は、例えば社会福祉の受益者、社会によって面倒を見てもらっているような人にも、有償のボランティア活動の機会を提供しているということですから、有償か無償かで判断することは難しいと思います。ボランティア活動というのは、活動する人自身が生き生きとし、自分も役に立っているということで立ち上がるというか、そのことが目的ですから、お金がかかっても良いのです。そのことを聞いて私は非常に安心しました。

日本の場合は、状況が少し異なります。活動をしている人の中には、予算があれば自治体が有給の人を雇ってやるべき仕事を、自分達が無償でやっている、こんなに時間も使って一生懸命やっているのだから少しぐらいお金をくれても良いんじゃないの……と考える人もいるわけです。これは私は違うと思うのですね。同じ有償ボランティアと言っても、イギリスとは発想が違います。ですから、有償だから無償だからというのではなくて、その原点に戻り、活動を行う人が自主的に何をしたいのかがまず一番あって、そして本当に必要であれば有償であることもよろしいんじゃないかと思えます。

## 日本の NGO の現状とこれからの課題

「NGO の組織の立ち上げと法人化」についてですが、ご承知のように、NPO 法人というものが長い時間をかけて誕生しました。そして現在まで

に約6,000という団体が全国にできているわけですが、ここで、組織を法人化したほうがプラスなのか、マイナスなのかについて見ますと、それはその団体が置かれている状況によります。既存の法人は主務省庁によって監督され——十分監督していないがゆえに、変な問題がいろいろと起きていますが——悪いことをすると罰せられたんですね。ところがNPO法人には主務省庁がありません。各自治体、千葉であれば県の中にNPO法人の窓口があって、そこに申請書を出せば、比較的規制が少なくNPOを立ち上げることができます。法人格を得ることができるわけです。では、オウムみたいな団体がNPO法人と称して何かやりだしたらどうするのという問題も当然出てきます。監督する役所がないわけですから、代わりにそれに対応できるとしたら、それは情報公開です。ですから、情報公開は徹底的に求められます。もし承認を受けた法人が情報公開をきちっとしない場合には、資格を取り上げられることもあります。ところが情報公開については、日本人はまだ慣れていないものですから、せっかく公開されていても、市民が公開情報を入手してその団体を監督し、「この団体がやっていることはおかしいじゃないか」と言うことが自分達の義務だという意識は、まだまだ一般の人には欠けています。したがって、ここには非常に危険性があります。NPOの名前において変なことをする団体もこれから出てくるかもしれません。

次の「税制上の優遇措置」ですが、日本でも昨年の10月1日から、NPO法人格を得た団体でも税制上の優遇措置のための認定法人の資格を取ることができるようになりました。この資格取得のことを簡単に申し上げます。これはアメリカで行われているものですが、非営利の民間団体が収支の面でいかに多くのパブリックサポートを受けているか——一般の人々によってサポートされているか——で判断されるというものです。つまり、NPO法人の運用を、中心人物とその親族など関係者だけの資金で行い、免税などを使いながら適当にやっていないか、ということをチェックするわけです。それが下敷きになって日本にもできたわけですが、まだあまりにも敷居が高い。例えば、寄付の3,000円以下は勘定に入れてくれ

ません。またある金額以上も勘定に入りませんが、これは特定の人がどかっ  
とお金を入れて NPO として利益を得ようとするのを防ぐためです。し  
かし日本の NPO、NGO への寄付は 1,000 円とか 500 円というのもあるの  
です。そういうのは計算に入れないというと、いかに多く一般のサポート  
を受けているかという評価、資格にはならないわけです。ですから今、も  
う少し日本の状況に合ったものに改善しようとしています。

日本の NPO と政府の最大の見解の相違点は相続に関わる部分です。実  
は、アメリカの NPO の財源で非常に大きなパーセンテージを占めている  
のは、相続です。例えば、「子供には十分教育をした。したがって、自分  
が死んだ時には、自分の家、土地などは、良い仕事をしている NPO に寄  
付をしたい」という、つまり、不動産を NPO に寄付してしまう。当然そ  
れは免税になるわけです。しかしこれは日本では、今年の 10 月 1 日から  
発足した優遇措置の中には含まれておりません。実はこういう申し出は、  
私が事務局長をしている間にも JVC に対していくつかありました。けれ  
ども、亡くなった方が正式の遺言を残されたにもかかわらず、その分は免  
税にならないわけですから、御子息が、それならあげるわけにはいかない、  
ということで実現しませんでした。こういうことが解決されますと、今お  
金が足りないという日本の NGO の状況も多少は改善されていくのではな  
いかと思います。

「自治体と NGO」にいけます。昨日のニュースを見ていましたら、栃  
木県の足利銀行では、民間企業や個人から、銀行を支えるための寄付金  
がたくさん集まり、再建に向けて今大変な努力をしている、とありました。  
そして、その銀行の方はただ待っているのではなくて、この企業とこの企  
業が組んだら双方にとって良いだろうと思うような——両社の部品をうまく  
合体させることによって新しい技術を開発できるような——中小企業を、  
県内だけでなく他県からも探すんですね。これはその暁において、足利銀  
行に預金してくれるか、取り引きしてくれるかどうかそれは分からないけ  
れども、少なくとも自らの預金者に対してプラスになるようなことを銀行  
員の方が歩き回ってやっているということに、私は驚きました。このよう

なことは、地方自治体の NPO 関係の方にもあてはまるのではないのでしょうか。

NPO で働く多くの人々は昼間は生活のために働いています。夕方5時に仕事が終わって、それからどこかに集まって、狭い所で会議をしたりするのです。ボランティアです。あるいは土・日にやっています。ところが役所は良い部屋を持っています。冷暖房も効いています。そして「じゃあ、NPO と良いネットワークを組むために場所を提供しましょう。広報してあげましょう」と言います。その話し合いをするために役所は仕掛けて——私はあえてこう言っています——待っていますが、平日の昼間に仕掛けて待っていても NPO との連絡はつきません。今は県内の NPO の所在は分かっているのですから、やはり足利銀行の方みたいに自治体の方も、待つのではなくどんどん足を運んで、少しは謙虚に「会合をオブザーブさせて下さい」とおっしゃってみて頂きたい。「あなた来なくて良いよ」と言われることもあるでしょう。でもイベントの手伝いなどをしたりするなかで「こういうことをすれば良いんじゃないですか」という会話も始まります。そして、その自治体職員が NGO にとってなくてはならない人になった時に、自治体と NGO の本物の関係が生まれる。私は「緊張感のある友好関係」と言っているんですが、これを作らなければいけません。役所の方は、言いなりになる良い子の NPO を大事にしたがります。でも、そんな NPO に良い仕事は絶対にできません。役所に対してうるさいことを言う、特に環境問題、あるいは町づくりの分野では、役所と対立しないわけにはいきません。そこでうるさがられるくらいの民間団体でなければ、本当の仕事はできないのです。また急に「官と民との関係は緊張感のある友好関係」なんて言ってもできませんから、身近な所からそういうものを作り出していく。ある時は「あなたはそう考えているけど、私はここは違うと思う」というようなやり取りがあって、頭にくることもあるかもしれない。それを乗り越えて私はあなたが必要であり、あなたには私が必要である——そういう関係を作っていく。仲が良いということは、いつも同じ意見だということではない、ということを私達は考えていかなければならな

と思います。

最後に、最近世間を騒がせている「アフガン復興支援会議への NGO 出席拒否」という問題ですが、政治家・外務省と NGO の関係がどうあるべきかということ、ここで正面から取り上げてお話するほどの価値はないと感じています。今回のアフガン復興支援会議のような大きな国際会議において、政府だけでなく NGO も参加することは、20 年以上も前から世界の流れです。その当然のことを鈴木宗男氏という一政治家の意向を入れて、外務省が NGO の出席拒否をしようとしたことは間違いです。しかし今回の事件で、NGO という言葉が連日連夜、新聞・テレビに出たことで、「何か NGO というのは重要なんだ」「NGO のことでもめると、大臣がクビになるんだ」ということを、今まで NGO の存在を知らなかった一般の人達も知るようになった。そういう意味では、一つの利点があったというふうに思います。以前、カンボジアの復興協力に関する会議の時には、議員の干渉はありませんでしたが、外務省自体が、日本の NGO は会議に出席する必要はない、という考えでした。カンボジアに対しては、それまでの約 10 年間にわたって、日本を含む西側の国の政府間援助がなかったため、NGO がその間の支援をしてきていました。JVC もその中にいました。そういう 10 年間の断絶があり、つい最近のことも知らないで一体政府間だけの話し合いで何を決められるの、という思いでした。しかしすぐに、そのことに対して諸外国の外務省から日本の外務省に抗議がありました。それは、一緒にカンボジアで働いていた NGO の横のつながりで、47 団体が皆、「日本政府がばかなことを言っている」ということで自国の外務省に連絡を取ってくれたのです。実際に文字で見ましたから、あの頃はまだ、テレックスとかそういうものだったと思います。日本は外圧には弱いですから、「どこどこからも文句が来た」というようなことで、NGO の出席が決まりました。今回のアフガンの問題に関しては、外務省側にも問題があったかもしれませんが、NGO も、まだこれから力をつけていかないと対等には参加できないというふうに私は考えております。

ご質問がありましたらお受けしたいと思います。

## 質疑応答

**質問** 今日、初めて星野昌子先生のお話を聞いて、非常に感動いたしました。「地域社会と NGO」のキーワード、この問題を具体的にわかりやすくお話ししていただきましてありがとうございます。私、近くの稲毛区宮野木に住んでおります田中と申しますが、2点ほどお聞きしたいと思います。

1 点目は Quango についてです。先進国の中でなぜ、日本とドイツが Quango なのか。しかも、ドイツの場合は緑の党というのがありまして、市民社会が非常に盛んだと言われています。世界から見ますと NGO の象徴的な存在、今の国を動かしているのは確か NGO が政権を取ったからだと思うのですが。それなのにどうして Quango と言われるのでしょうか。

2 点目は、「NGO を生み出す社会条件」についてです。この背景というのは、阪神淡路大震災の時、行政や地域の民間企業ではやっていけない。そこで地域の住民がボランティア活動で、また全国の市民ボランティアが 1 日 1,000 人以上、阪神に集中しまして、地域のボランティア活動も活性化しました。そんな中で、地域社会との関わり、市民ボランティアの問題がクローズアップされました。そして確か 4 年前でしたか、松原さん、山岡さん達が中心になって日本の社会にも NPO を作ろうじゃないかと、そういう社会運動、市民運動が起こりました。それから、この敬愛大学、各大学も地域社会との関わりということで情報公開をして、こういう講座やシンポジウムなど、ぜひ活性化して頂ければありがたいと思います。どうもありがとうございました。

**星野** ありがとうございます。順序を追ってお話いたします。私は 2 度ほどドイツに会議で行ったことはありますが、ドイツの専門家ではないのでどれだけお答えできるかは分かりませんが、やはり日本もドイツも統制することが上手なのではないかと思います。

だいたい NPO というのは、イギリスの専門家に言わせると、crea-

tive chaos だと。つまり、カオスで混沌としていてなんだか分からないけど、何か新しいものはそういう中からしか生まれてこない。したがって、混沌としていることを決して気にしてはいけない。整理され、統制された中からは、本当の creativity は生まれてこない、と。こういうことは、イギリスでは普通の方もおっしゃいます。Creative chaos、これはすばらしい。日本は今、NPO がごちゃごちゃしている、それも大変結構。その中から新しい力が生まれるのですから。ところが、統制しないと気に入らないのが日本です。

もう1例を挙げますと、私がバンコクの航空会社で働いていた頃、広報担当官だったのですが、業界の方がチャーター便に日本航空を使って、フランスから観光や会議に来ることがありました。そういう場合、「飛行機の前にならんで写真を撮ってください」というのが、主催者から航空会社に命令で来るわけです。けどフランス人たちは「なぜ飛行機の前にならんで写真撮らなきゃいけないの」「撮りたい人は撮りなさい。私は嫌だ」と言ってなかなか並んでくれないわけです。しかし日本とドイツの観光客の場合は、3分で並びます。ちゃんと間から顔を出しますし、こっちが何も言わなくてもビシッと並びます。そういうところが似ている、これはどうしてなのでしょうね。どうして似ているのかということはお答えできませんが、そういう様々な生活の面での類似性が、この NPO に対する考え方にも現れているというふうに思います。つまり、両国に共通しているのは、非常に力の強い政府が、NGO が必要だということになったならばどんどん作ってしまう、そういう体質だというふうにしかお返事できません。

二番目の、阪神淡路大震災でのことですが、ああいう場合は民間企業がどうするというようなことではなくて、やはり自治体がこれを全部処理するのが本当なのです。そして、生命の危険などについては自衛隊などもその任務を負っていると思うのですが、それで全てを満たすことができなかったので、全国からボランティアが集まった。これは特にご質問という形は取らなかったと思いますが、お話に出ました山岡さんは私が代表理事をしている日本 NPO センターの事務局長です。そして確かに、この非常に不

幸な大地震が、日本の中にこの制度化の必要性みたいなものを目覚めさせたという意味で、おっしゃるとおりだと思います。

敬愛大学は、これからも地域に向けて広く開かれた大学でありたい——いろいろな公開講座、昨年はちょっと休みましたけど、佐倉の方、市民の方も参加しておられる中国での植林のボランティア活動など、できればいろいろな部分で市民の方達とコミュニケーションをはかり、そういう方向を強化していきたい——と考えていると思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

**質問** 個人的な質問ですが、学生ボランティア活動の具体例をいくつか調べていただきましたが、そういう情報はどこで手に入れることができるのか教えて下さい。

**星野** これは非常に問題だと思っています。今までは「こういうところでこういう人手を必要としています」というような情報をボランティア活動の授業からは発信していませんでした。それは最初から申し上げているように、「自分は何をしたいと思っているか」から始まるべきだと思うからです。私は今回、3年目は失敗したと申し上げました。簡単にやって単位を取りたいというような報告書もいくつかありました。どうも目の前にパターンがあると、そこに合わせて形だけ整えようとする。小さい時から親に「お前はこうだよ。こうしなきゃだめだよ。こうしなさい」と言われて、そこに当てはめてずっと今まで来たのね。「こんな先生」と思っても「しょうがないな、先生の言うとおりにやってやるか」と。こういうのは得意です。ですから「こういう例があります」と言えば「じゃあ、僕はこの例にあてはめよう」ということになり、皆さんの本物を引き出す邪魔をすることです。また、今までは例も少ないので、そういう公表をしていなかったこともあります。しかし、これからは情報を発信する方向で動こうとしています。

ただ一つ気になりますのは、情報を出すことが、個人的な問題、離婚をしたとか一般的に白い目で見られるような状況を抱えている人にとっては、プライバシーに関わってくるということです。「こんな人が必要としてい

ます」と周りに言うわけですから。そしてまた、活動を行う学生にとっても、情報の公開はマイナス面があると思います。これはボランティアの本質に関わってくることもかもしれませんが、活動している人の多くは「こんな良いことをしました」というふうにはやりたくない。そういう公表したくないものほど質が高い場合が多いのです。例えば先ほどの重度身障者をお世話する話にしても、happy ではないですよ。しかし、自分は受刑者だけれども、そこでその人のために何かできることがあった……そして、その両者の間には非常に質の高いものが生まれてくる。それは、その人にとっては周りに言うようなことではないわけです。そういう心の問題を大切にしようと思うと、「ここへ行けばこういう仕事があってこうです」という情報を発信するのはちょっとボランティアの本質とは相反するというのが私の考えです。

**質問** 今日はどうもありがとうございました。星野先生の話聞いて、皆さん NGO・NPO について興味を持って「やりたいな」という人がすごくいると思うんですよ。現実には今の日本の社会において活動をやりたい人は多いと思うのですが、社会的、経済的に、例えば生活をするのも困難な時代になっていく状況の中で、有給スタッフが多くなってしまえば NGO・NPO ではないと思うのですが、やはり NGO・NPO だけで生活できる人は少ないと思うんですよ。税制上の優遇措置とか法整備とかも、欧米に比べると未成熟ですよ。そういう中で、やりたいという人に向けて、簡単に溶け込めるような何かアドバイスをいただけたらと思います。

**星野** NPO の有給職で生活を立てるというのは、さっきからお話しているボランティア活動というのとは少し違うんですね。NGO・NPO の中で、決して貯金するほど収入はないけれど、それによって生活を立てていくという有給のポストはあります。だけど、そこに到達するまでには長い時間をつぎ込まなくてはならない。その間はポケットマネーでやっていかなければならないわけです。私自身も、日本国際ボランティアセンターが始まった時は無給でした。その前も、現地雇用の仕事でしたから、たいして貯金なんかありません。でも、インドシナ難民のために日本人だけが何

もしないでいて良いのかと思ったので、自分の時間を使い、自分のお金を使ってやりました。そういう期間というのがあるんですね。そしてそれが今、学生達にも非常にネックになっている。難しいというのがよく分かります。そのためにはどこかでアルバイトをしながら、ということになるんですが、それを支援していこうという企業も今少しずつ出てきています。自分の中にもし、本当にやりたいもの、例えば、自分の地域の町おこしみたいなおことに興味がある場合は、まずあなたがやろうとしていることを周りに知らせて、そして「それだったら、自分達も手をつないで助けよう」という、少なくとも5、6人の人達が生まれてくるまでは自費です。自分の時間とお金、これなしにはできません。とても厳しいですけど、でも、そういうものを乗り越えてやってきた人達が、今NPOなどの中心になっているわけですね。最初は本当に無給の状況でやっている人が多いと思います。

それではどうも皆様、ご清聴ありがとうございました。

(2002年3月16日)